

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

収集された物と収集されなかった物：
ニューブリテン島の収集物をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白川, 千尋 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002258

収集された物と収集されなかった物 —ニューブリテン島の収集物をめぐって—

白 川 千 尋

(日本学術振興会特別研究員)

(国立民族学博物館外来研究員)

1. はじめに

本稿の目的は、ジョージ・ブラウン (George Brown) による収集物のうち、ニューブリテン (New Britain) 島とその周辺の島々¹⁾の収集物をめぐって分析と考察を行うことである。とりわけ収集された物と収集されなかった物という座標軸を手がかりにニューブリテン周辺の収集物について検討を行うことで、ブラウンによる収集という営みが現地社会にどのような波及効果を与えたのかという問題に関して予備的考察を試みる。ここで「予備的考察」としたのは、現時点における資料の制約などにより、未だ議論として十分な結論を導き出すことができないためである。したがって、本稿における考察は、上の問題にアプローチするさいに留意すべきいくつかの点の指摘に留まる。

本稿は、本節を含めて6つの節から成る。まず次節でブラウンのニューブリテンにおける活動を概観したのち、第3節では彼が同島周辺で収集した器物にみられる傾向について分析を行う。そのさいに、収集物に入っていないもの、すなわち収集されなかった器物として、とりわけトゥブアン (*tubuan*) やドゥクドゥク (*dukduk*) とよばれる仮面があることを指摘する。つぎに第4節では、これらの仮面とそれに関連する秘密結社などの文化事象に対するブラウンの姿勢について考察を行い、併せてブラウンの収集活動の現地社会に与えた波及効果に関する仮説を提出する。第5節では、ブラウン以外の西洋人と現地の人々の間における上述の仮面をめぐるネゴシエーションの様相や現地社会における仮面の意味づけの歴史的変容などを明らかにすることで、ブラウンの収集活動の波及効果について歴史的視点から考察を行うさいに必要な情報の提示を行う。最後に、第6節では、第4節で提出した仮説を今後検証して行くさいに留意すべき諸点を指摘する。

2. ニューブリテン島におけるブラウンの活動²⁾

サモアにおける14年の長きにわたる伝道活動の後、ブラウンが新たなる活動の場として選んだのがニューブリテンである。彼は同島での活動に備えてまずフィジーに赴き、活動をともにする複数のフィジー人宣教師たちを選抜している。そして、これらフィジー人宣教師およびサモア人宣教師とともにニューブリテンを目指した。

ブラウンの一行がニューブリテン周辺に到達したのは、1875年8月である。より正確には、同年8月15日にデューク・オブ・ヨーク諸島のポートハンター (Port Hunter) に初めて上陸し、礼拝を執り行っている (Brown 1908 : 88-89 ; Salisbury 1970 : 21)。彼がポートハンターに上陸したのは、偶然によるものではない。ブラウンの手紙からは、彼がニューブリテンへ出発する以前からポートハンターに最初の拠点を構えようと考えていたことが明らかである。彼は、この地域の人々が西洋人などに対して友好的であるとの情報をこの地域の海域を航海した経験のある船乗りたちから得ており、この情報にもとづいてポートハンターを上陸地点に選んだのである³⁾。

上陸の数日後、ブラウンらはポートハンターにおいて宣教拠点を築くべく、早速この地域の3人の首長⁴⁾より土地を購入し、家屋の建設を始めている。ブラウンによれば、首長たちとの間に友好関係を築くため、実さい見積もられた額よりも多くのものが土地の購入のために支払われたという。このとき、具体的にどのようなものが彼らに支払われたかは定かではない。ただし、そのさいに首長の1人がマスケット銃と弾薬を要求したが、ブラウンはこれを断っている (Brown 1908 : 90)。ブラウンはその後現地の人々に武器類を与えることを拒んだが、これは武器類などの供与を介して交易を行っていた西洋人商人たちと自分たち宣教師の相異を明らかにするためであった (Salisbury 1970 : 20)。

ブラウンはポートハンターに拠点を築き始めるのとときを同じくして、ニューブリテン本島への接近も試みている。そして、1875年8月22日に同島のマテュピット (Matupit) に上陸している⁵⁾ (Brown 1908 : 93)。マテュピットの人々は、当時近隣の人々にその好戦的な性格によって恐れられていた。実際1873年には、サモアにあったドイツの貿易会社ゴッドフロイ (Godeffroy) から派遣され、当地に交易拠点を築こうとしていた2人の西洋人商人 (John NashとW. T. Wawn) の試みが、人々による家屋への放火という出来事によってあえなく頓挫している (Brown 1908 : 92 ; Salisbury

1970:20)。しかし、こうした出来事とはうらはらに、ブラウンらは友好的な態度で迎え入れられた。

以上のような経緯を経て、ブラウンはニューブリテン周辺における活動を開始した。そして、ポートハンター以外にも数ヶ所に宣教拠点を築き、それらの拠点に彼とともにニューブリテンにやって来たフィジー人やサモア人の宣教師たちを配していった。一方、宣教拠点が築かれるとともに現地の治安状況は次第に改善され、これに目をつけた西洋人商人たちもニューブリテン周辺に定着していった。当時西洋においては石鹼の原料としてコブラの需要が急増しており、彼らはこの取り引きを目的としていたのである。しかし、コブラをめぐる交易の活発化が、ニューブリテンにおけるブラウンらの活動に重大な事件をもたらすこととなった。

その事件とは、1878年4月4日に4人のフィジー人宣教師のグループがブランシュ湾 (Blanche Bay) 内陸部で現地の人々の待ち伏せ攻撃に遭い、殺害されたことである⁹⁾。彼らの遺体は切り分けられて多くの集落に贈られ、人々に食べられることとなった (cf. Salisbury 1970:23-24)。ソリスベリーは、この事件をコブラ交易をめぐる利害関係によって生じたものと分析している。当時西洋人商人たちの活動範囲は沿岸部に限られており、彼らが内陸部を含む広範な地域からより多くのココナツの実を集めるためには現地人の仲介者が必要であった。そして、この役割を担っていたのが沿岸部集落の首長たちであった。彼らは西洋人商人たちからさまざまな物資を与えられるのと引き替えに、内陸部などから集めたココナツの実を供給していた。しかし、次第に商人たちは内陸部の人々と直接交易を行おうとし始めた。これに対して交易による既得権益を失うことになる仲介者の首長たちは反発し、上のような事件を起こしたのである。彼らはこの事件の後、ブラウンと商人たちに対して自分たちの仲介者としての独占的権利を主張し、これを無視した場合には同じようなことが彼らの身にも起きるだろうと脅迫した (Salisbury 1970:23-24)。この点で、フィジー人宣教師たちは見せしめとして殺害されたものといえるだろう。

ブラウンら宣教師たちと西洋人商人たちはマテュピットに集まり、対応策を検討した。その結果、事件を起こした人々に対して報復することが決まり、彼らは追討団を組織した。この追討団にはブラウンら宣教師や商人たちばかりではなく、彼らと友好関係にあったマテュピットの人々も含まれていた。追討団は宣教師殺害に加担した人々の居住する集落を襲撃し、彼らを射殺するとともに家屋を焼き払った。こうした厳し

い報復行動によって、ブラウンらに対する人々の敵対的姿勢は解消された。そして、ブラウンらの活動は、西洋人商人たちによるコブラ交易の拡大と軌を一にする形で活発化していったのである⁷⁾。

事件の後、ブラウンのニューブリテンにおける活動は1881年1月まで続けられた。この間、彼は健康を害してニュージーランドでの半年にわたる療養生活を余儀なくされている。また、ニューブリテンにおいて生活をともにした妻と3人の子供のうち、2人の子供を病気によって亡くしている。このような精神的、肉体的困難に直面しながらも彼は活動を続け、着実に同島におけるキリスト教信徒を増やしていった。

3. ニューブリテン島における収集物

ブラウンは前節で述べた伝道活動と並行して、ニューブリテンにおいて数多くの器物を収集している。現在国立民族学博物館に所蔵されている彼の南太平洋における収集物のうち、ニューブリテン周辺において収集された器物は、明らかになっているものだけでも157点に上る。これらの収集物を、武器、装飾品、生活用具、儀礼用具、楽器、そのほかの6つのカテゴリーに分類したものが表1である。

表1からも分かるように、収集物においてもっとも多くを占めるのが武器類である。ブラウンに限らず、当時西洋人から「未開の地」と位置づけられていた地域で伝道活動を行っていた宣教師のなかには、伝道活動と並行して現地社会で使われていた器物の収集を行っている者が少なくない (cf. Lawson 1994)。こうした宣教師たちの収集物においては、彫像などの儀礼用具とともに武器類の占める割合が高いことが指摘されている。トーマスはこうした傾向を、集落間の戦闘が終わりを告げ、異教的信仰が放棄されることによって伝道活動が成功した証として、戦闘や異教的信仰を象徴するものが集中して収集された結果、生じたものと分析している⁸⁾ (Thomas 1991: 151-162, cf. Eves 1998)。このトーマスの分析は、ブラウンの収集活動の意味について考えるさいに1つの手がかりとなるものであろう。

しかし、ブラウンが集めた器物の多様性を考慮に入れるならば、伝道活動の成功を示すものの収集という観点からのみ、彼の収集活動を捉えることは一面的であるように思われる。たとえば、表1に示したように、ブラウンによる収集物においては武器類と並んで装飾品や生活用具の占める割合も無視できないほど高い。これに対して、集められた儀礼用具は装飾品や生活用具よりはるかに少ない数に留まっている。これ

表1 ニューブリテン島における収集物

分類	内 訳	数
武器	槍(29)、棍棒(25)、投石器(2)、棍棒の頭部(1)、棍棒・斧(1)	58
装飾品	腕輪(24)、頭飾り(4)、ネックレス(3)、樹皮布(2)、 胸飾り(1)、耳飾り(1)、装飾品・装身具(1)	36
生活用具	かご(12)、手斧の刃(8)、袋(5)、漁具・魚用罾(2)、漁網(2) 漁具(1)、網作り道具と網(1)、網・スカート(1)、 柄杓・匙・へら(1)	33
儀礼用具	仮面(5)、舞踏用装飾品(5)、貝貨(3)、儀礼用櫛(1)、 彫刻品・舞踏用装身具(1)	15
楽器	太鼓(4)、口琴(4)、パンパイプ(3)	11
そのほか	頭蓋骨(1)、神聖な石(1)、植物繊維(1)、ボート模型(1)	4
	総 計	157

らの点を考慮に入れるならば、ブラウンの収集活動はルーベルらが指摘しているように、むしろ博物学的関心によって裏打ちされたものと考えの方が妥当であるように思われる。そして、このような関心にもとづいてさまざまな器物を収集したブラウンは、宣教師であると同時に収集家 (collector) であったともいえるだろう (Rubel and Rosman 1996)。

収集家としてのブラウンは、現地社会において入手しがたい物資、たとえば鉄製品などを現地の人々に与えることによって、多様な器物を手に入れていった。ルーベルらは、こうしたブラウンの活動によって、たとえばニューブリテンに隣接するニューアイルランド島では、現地の器物が取り引きされるマーケット的な場が一時的に出現した可能性について指摘している。たとえば、ルーベルらが引用しているブラウンの手紙には、人々がたくさんの木彫をブラウンのもとに率先して持参しており、彼は鉄製の輪と引き替えにそれらを購入していたことが記されている (Rubel and Rosman 1996: 63)。

このようにブラウンは現地の人々にとって魅力的な鉄製品などの稀少品を与えることでさまざまな器物を手に入れていったが、彼は現地の社会で使われていた全ての器物を余すことなく収集したのではない。彼がニューブリテンにおいて収集した器物について検討してみると、とりわけ際だった特徴として、現在の文化人類学的議論においてニューブリテンの代表的文化事象として頻繁に言及されるトゥブアンやドックド

ックとよばれる仮面が、収集物のなかに含まれていないという事実を指摘することができる。表1に示したように、ブラウンによる収集物のなかに5つの仮面が含まれているが、それらはいずれも祖先を表したロル (*lor*) とよばれる仮面であり、トゥブアンやドックドックではない。

ただし、ここで若干考慮に入れておかねばならないことがある。それは、国立民族学博物館所蔵のジョージ・ブラウン・コレクションが、ブラウンによる収集物の全てではないということである。収集物の一部は1879年にシドニーで行われた博覧会 (Sydney Exhibition) で展示されたが、その後1882年の火災によって消失している (Brown 1908 : 128)。このときの火災によって消失したコレクションのなかに、トゥブアンやドックドックの仮面が含まれていた可能性も否定できない。したがって、現在の国立民族学博物館所蔵のコレクションのみにもとづいて、ブラウンがトゥブアンやドックドックの仮面を収集しなかったと断定することは適切ではないかもしれない。しかし、1882年の火災によって消失したコレクションはブラウンによって1876年と1877年にオーストラリア博物館 (Australian Museum) に寄贈されたものであること⁹⁾、また彼はその後も1881年までニューブリテンに滞在していることなどを考慮に入れると、ブラウンがトゥブアンやドックドックの仮面を収集する機会は1878年から1881年の間にもあったといえる。しかし、それにも関わらずこれらの仮面が現存する収集物のなかに含まれていないことを考えると、ブラウンはこれらの仮面を収集しなかったか、あるいは収集したとしてもごく少数であったと推定することが可能である。

4. トゥブアンおよびドックドックとブラウンの姿勢

ブラウンによってトゥブアンやドックドックの仮面がほとんど収集されていないという点を前提とするならば、つぎに検討すべきはこれらの仮面に対する彼の関心の有無であろう。本節ではこの点について考察を行うために、これらの仮面に関連する文化事象に対するブラウンの姿勢に関して検討を加えたい。しかし、その作業に入る前に、まずトゥブアンやドックドックに関連する事象について、主にエリントンとノイマンの民族誌を参考にしながら簡単な解説を加えておきたい (Errington 1974; Neumann 1992)。

トゥブアンやドックドックの仮面は、ニューブリテン東北部のガゼル (Gazelle) 半島に居住するトーライ (Tolaiの人々の社会やデューク・オブ・ヨーク諸島とその周辺

の島々の社会に広く分布している¹⁰⁾。これらの社会には男性秘密結社が存在するが、トゥブアンやドゥクドゥクの仮面は、この男性秘密結社と密接に関係している。

トーライ社会では、男性たちは少年期に女性たちが近づくことが許されない林や海岸にあるタライウ (*taraiu*) とよばれる秘密の場所で、秘密結社の加入儀礼を受ける。人々の間では、トゥブアンやドゥクドゥクは霊的存在として恐れられているが、少年たちは加入儀礼のさいにトゥブアンやドゥクドゥクに実は人間が扮していることを教えられる。この秘密をはじめとして、トゥブアンやドゥクドゥクにまつわるさまざまな秘儀的知識が秘密結社の成員によって独占的に保有されている。

トーライ社会はヴナタライ (*vunatarai*) とよばれる母系出自集団から成っているが、個々の集団にはそれぞれ独自のデザインを持つトゥブアンやドゥクドゥクが存在する。このうち、トゥブアンには多くの場合女性の名前がつけられている。トゥブアンはそれぞれバラグアン (*balaguan*)、マタマタム (*matamatam*)、ヴナヴナ (*vunavuna*) とよばれる死者にまつわる儀礼のさいに、タライウにおいて秘密結社の成員の手で作られ、人々の前で踊りを披露する。また、トゥブアンは、慣習的な規範や秩序を乱した者に対して貝貨¹¹⁾などを強奪したり、暴力を加えたりする。他方で、ドゥクドゥクはトゥブアンの子どもとされ、上記の3つの死者にまつわる儀礼のうちマタマタムのさいにのみ作られる (Neumann 1992: 63-64)。

一方、デューク・オブ・ヨーク諸島の南に位置するカラヴァル (Karavar) 島では、秘密結社はその内部がいくつかの階梯に分かれている。男性たちは、霊的存在や呪文に関する知識、トゥブアンやドゥクドゥクの仮面の著作権などを貝貨を用いて購入することで、上位の階梯へと上って行く。トーライ社会と同様、カラヴァル社会でもトゥブアンは女性と位置づけられているが、最上位の階梯に達した者だけがトゥブアンの仮面に目を描き込むことができる。この「トゥブアンの男 (*tene tubuan*)」とよばれる男性によって目が描き込まれることにより、トゥブアンには野生の霊 (*wild spirit*) が宿り、危険な力を発揮するものになるという。これに対して、男性と位置づけられるドゥクドゥクは、秘密結社の最上位の階梯に達した者でなくとも作ることができる。仮面には目が描かれず、野生の霊が宿ることもなく、したがって危険な力も持たないとされる (Errington 1974: 31)。

このように概略的に示したトゥブアンおよびドゥクドゥクの仮面とそれに関連する秘密結社や各種の儀礼などについて、ブラウンの姿勢はどのようなものであったのだ

ろうか。まず、それらの事象に関する記録を、彼の自伝から拾ってみよう。

ブラウンはポートハンターに上陸した数日後、宣教拠点となる土地を購入した相手の首長を朝食に招待している。このとき早くもブラウンは、この地域における秘密結社の存在を知ることとなった。彼は、招待した首長が朝食に供された豚肉を食べるのを拒んだことから、首長が豚を忌避する禁忌を持つ秘密結社の成員であることを知ったのである (Brown 1908 : 91)。

ブラウンの自伝においてドゥクドゥクの語が初めて現れるのは、1875年10月7日の記録においてである。彼はこの日、ワートピ (Waatpi) という集落でドゥクドゥクと出会ったことを記している。踊りながら現れたドゥクドゥクに対して、集落の人々はその行く手を遮って暴力を加えられることを恐れ、ドゥクドゥクに近づけなかったという。なお、ブラウンはこの記録のなかで「我々はまたドゥクドゥクに出会った」と記している。このことから、彼はすでにこれ以前にもドゥクドゥクをみる機会があったと推察される (Brown 1908 : 111)。

また、1879年3月5日の記録においては、秘密結社に関する言及がみられる。それによれば、ラルアナ (Raluana) という集落において宣教師の家と礼拝堂が秘密結社の成員だけが立ち入ることの許される場所、タライウに建てられてしまったため、ブラウンは女性たちがこの場所で礼拝などに参加することができるようにするために対応策を講じなければならなかったという。このさい、彼は女性の立ち入りをめぐって秘密結社の成員たちとの間にトラブルを起こしたが、彼らに代償となるものを支払うことによって、最終的に女性たちの立ち入りに関する禁忌を除去することに成功している¹²⁾ (Brown 1908 : 293)。

ブラウンの自伝におけるトゥブアンやドゥクドゥクに関する記録は、少なくとも以上の3カ所に限られる。しかし、これらの部分からは、彼がトゥブアンやドゥクドゥクとそれに関する秘密結社の存在について十分把握していたことが窺える。また、自伝のみならず、彼が1910年に出版した著作『メラネシア人とポリネシア人 (Melanesians and Polynesians)』を検討すると、ブラウンは単にトゥブアンやドゥクドゥク、そして秘密結社の存在を把握していただけではなく、それらに対して詳細な民族誌的知識を持っていたことも理解することができる (Brown 1910)。

『メラネシア人とポリネシア人』は、ブラウンが伝道活動を行った南太平洋の諸地域に関する民族誌的著作である。このなかで、彼はドゥクドゥクと秘密結社について

12ページにわたる詳細な記述を行っている (Brown 1910 : 59-72)。この記述は18章から成る著作の第3章にあり、45ページが当てられているこの章の約4分の1を占めている。このことから、彼がドックドックなどに対して強い関心を持っていたことを窺い知ることができる。また、ブラウンはこの著作の冒頭で、ニューブリテンに滞在していたさいに英国学術振興会 (British Association for the Advancement of Science) が刊行した『アンソロポロジカル・ノーツ・アンド・クエリーズ (Anthropological Notes and Queries)』を用いて現地の人々にインタビューを行い、情報の収集を行っていたことを記している (Brown 1910 : vi)。このことから、彼はドックドックなどに関しても、当時の民族学的手法を用いることによって詳細な情報を入手していたと推察することができる。

このように、ブラウンはトゥブアンやドックドックをめぐる文化事象に対して少なからぬ関心を持っていた。その関心は、一面で民族学的とも言えるものであった。こうした点に留意するならば、彼がトゥブアンやドックドックの仮面を入手しようとしたと考えることも不自然ではないだろう。このことを裏付けるかのように、彼はドックドックの仮面をかぶった男性たちの写真やドックドックの装束の写真を少なくとも4枚撮影しており、そのうち1枚は彼の自伝、もう1枚は『メラネシア人とポリネシア人』のなかで用いられている。しかし、前節で述べたように、彼の収集物のなかにトゥブアンやドックドックの仮面は含まれていない。したがって、彼のトゥブアンやドックドックに関する関心を考慮に入れるならば、ブラウンはこれらの仮面を入手しようと試みたができなかったと想定することができると思われる。換言するならば、現地の人々はブラウンにこれらの仮面を譲渡することを拒んだと考えられるのである。

このようなブラウンと人々のネゴシエーションの状況を踏まえるならば、ブラウンの収集活動の現地社会に対する波及効果として、つぎのような仮説を提出することが可能である。ブラウンは現地社会における稀少品としての鉄製品などと引き替えに、多様な器物を収集しようとした。しかし、望んだもの全てを手に入れることはできなかった。すなわち、人々は彼らが使っていた器物の全てをブラウンに譲渡したのではなかったのである。その1つがトゥブアンやドックドックの仮面である。このように、人々はブラウンの収集活動に接するなかで、自分たちの身のまわりのさまざまな器物を彼に譲渡できるものとできないものに区別していった。このような区別は、ブラウンの収集活動がニューブリテンに滞在した期間、すなわち5年におよぶ長期にわたっ

て行われるなかで確たるものとなっていった。ここにおいて、トゥブアンやドゥクドゥクの仮面には、「ブラウンをはじめとする西洋人には容易に譲渡できぬもの」という従来にはない新たな意味が付与されることになったのである。

5. ブラウン以降のトゥブアンとドゥクドゥク

西洋の博物館や美術館に展示されたトゥブアンやドゥクドゥクに関する記録は、管見の及ぶ限りでは、先に言及したロールとよばれる仮面などほかの仮面類と比較すると著しく少ない¹³⁾。したがって、この点に基づくならば、トゥブアンやドゥクドゥクの仮面が西洋人に譲渡された例はブラウン以降も限られていたと考えられる。そうした限られた例を示すものとして、1979年にワシントンの国立美術館 (National Gallery of Art) で開かれたオセアニアの美術に関する展覧会に出品されたトゥブアンを挙げるができる。展覧会の図録には、このトゥブアンが後述するリチャード・パーキンソン (Richard Parkinson) という人物によって1895年に収集されたものであり、展覧会当時ドレスデンの州立民族学博物館 (Staatliches Museums für Völkerkunde) に所蔵されていたことが記されている (Gathercole *et al.* 1979: 240)。また、ビューラーらによる『南洋の島々の美術 (The Art of the South Sea Islands)』にはバーゼルの民族学博物館 (Museum für Völkerkunde) 所蔵のドゥクドゥクの写真が掲載されており (Bühler *et al.* 1962: 130)、ノイマンの民族誌にはケルンのライン州立写真資料館 (Rheinisches Bildarchiv) に展示されているトゥブアンとドゥクドゥクの写真が掲載されている (Neumann 1992: 227)。ただし、バーゼルとケルンのものについては、収集者が明らかにされていない¹⁴⁾。

ところで、ブラウンがニューブリテンに滞在して以降、トゥブアンとドゥクドゥクをめぐる状況はどのように変容したのであろうか。たとえばノイマンによれば、1960年代までにニューブリテンのガゼル半島の多くの地域において、トゥブアンやドゥクドゥクをとまなう儀礼は次第に行われなくなっていったという (Neumann 1992: 225)。これは、宣教師や植民地官吏などが、それらの儀礼とトゥブアンやドゥクドゥクに関連する秘密結社などを放棄させるべくさまざまな圧力を加えたことによる¹⁵⁾ (Epstein 1992: 243)。しかし、この時期、トゥブアンやドゥクドゥクをめぐる文化事象は一方方向的に衰退の道を辿り、完全に廃れてしまったわけではなかった。先に引用したノイマンによれば、トーライのイオナ・トギギ (Iona ToGigi) という人物は、1890

年代に宣教師や植民地官吏などによる圧力からトゥブアンを守ったことでトーライの人々にその名を記憶されているという。ただし、彼はトゥブアンやドゥクドゥクをめぐる事象を、西洋人たちとの接触以前の形のままで残していったわけではない。ノイマンの言葉を借りれば、むしろトギギはこれらの事象からキリスト教や植民地行政などに相反する要素を取り除き (deconsecration)、一面で西洋人に開かれたものに位置づけなおしていったのである¹⁶⁾ (Neumann 1992: 89)。

その一端は、ブラウン以降の西洋人たちに対するトーライの人々のトゥブアンやドゥクドゥクをめぐる対応のなかにも読み取ることができる。人々は、トゥブアンやドゥクドゥクの仮面をブラウンに譲渡しなかったかもしれない。しかし、ブラウンをはじめとする西洋人たちはそれらを撮影することを許されたのに加えて、トーライの女性たちは立ち入ることのできなかつたタライウにも入ることができ、写真撮影も許可された¹⁷⁾。このことは、西洋人の女性たちに関しても例外ではなかった。また、トーライの女性たちは知ることのできなかつたトゥブアンやドゥクドゥクにまつわるさまざまな秘儀が、女性を含めて西洋人たちには開示されたという (Neumann 1992: 226)。

さらに、トゥブアンやドゥクドゥクは、西洋人たちの求めに応じて披露されることもあった。その最たる例が、1896年にベルリンで開催された植民地博覧会 (Berlin Colonial Exhibition) におけるトゥブアンの展示である。この博覧会では、ペロ・トキンキン (Pero ToKinkin) という人物に率いられた5人のトーライの人々がトゥブアンの踊りを披露した¹⁸⁾。また、トキンキンは来客に、彼が持参したトゥブアンの仮面について秘儀的知識の部分も含めて詳細な解説を行った¹⁹⁾ (Neumann 1992: 226)。トキンキンらのベルリンへの渡航は、先に言及したリチャード・パーキンソンによって実現したものである (Salisbury 1970: 34)。英国系ドイツ人のパーキンソンは、ココナツのプランテーションを築くため1882年にブランシュ湾地域にやって来たが、彼はプランテーション経営だけではなく、動物学や民族学に対する強い関心も持っていたとされる (Epstein 1969: 17-18)。

ベルリンの博覧会には既存のトゥブアンが持参されたが、これまでなかった新たなトゥブアンが西洋人たちの求めに応じて作られることもあった。たとえば、1954年にはニューギニア本島のラエ (Lae) で、その地区の植民地弁務官 (district commissioner) がラエ在住のトーライの人々に対して政府の行事のさいにトゥブアンを作るよう要請している。人々はこれに応じて2つのトゥブアンを作り、既存のものとは別の名前を

付けている。ただし、彼らはそれらの名前が新たに作られたものであるという点から、この2つのトゥブアンを「本物 (real) 」ではなく、「偽物 (faked) 」のトゥブアンと位置づけたという (Neumann 1992 : 226-227) 。

トゥブアンやドゥクドゥクは、このようにして、表面的には西洋人たちに開かれたものとして位置づけられながらトーライ社会において生き残っていった。そのプロセスのなかでは、上に述べたように「本物」と「偽物」という区別が新たに生じるなどした。こうして生き残ったトゥブアンやドゥクドゥクには、1960年代後半に入るとさらに新たな意味が付与されるようになる。

この時期、トゥブアンにまつわる儀礼などは各地で再び盛んに行われるようになっていた。その1つの要因として、ニューギニア独立をめぐる社会的状況を挙げることができる。全国的な独立への動きに先駆けて、トーライではプランテーションとして割譲された土地の返還と西洋人などによる政治的支配の払拭を求める動きが1960年代後半から活発化した。この動きはマタウガン協会 (Mataungan Association) という組織によって中心的に担われており、この組織はニューギニア全体の独立というよりもむしろトーライによるトーライのための政府を要求するものであった。マタウガン協会はこうした政治的活動と並行して、トーライのさまざまな伝統文化の復興に関する活動も展開した。そして、そのなかには、トゥブアンやドゥクドゥクに関係する事象も含まれていたのである (Neumann 1992 : 169, 200) 。マタウガン協会は以上のような活動を展開するなかで、宣教師や植民地官吏による度重なる圧力にも関わらず生き残ったトゥブアンやドゥクドゥクに目を付け、その仮面を協会の活動を示すシンボルとして用いるようになった (Epstein 1992 : 243) 。こうして、トゥブアンやドゥクドゥクの仮面には、支配者としての西洋人に抵抗する「トーライ人」のアイデンティティの象徴ともいうべき新たな意味が付け加えられたのである。

6. おわりに

前節では、ブラウン以降近年に至るまでのトゥブアンやドゥクドゥクの意味づけの変容を明らかにした。そこでみたように、トゥブアンなどの仮面は最終的にトーライの人々のアイデンティティを表すシンボルとしての意味を付与されるまでになったが、私はその端緒となったのがブラウンによる収集活動だったと考える。ブラウンの収集活動によって、トーライの人々は彼に譲渡できるものとできないものという区別を身

のまわりのさまざまな器物に導入した。このうち、後者の最たるものがトゥブアンやドックドックの仮面であった。このように譲渡できるものとできないものという区別が生じることによって、譲渡されなかったものが西洋人に対するトーライの人々の抵抗の象徴としての意味を獲得して行くようになったと仮定することは不自然であろうか。あるいは、後に植民地主義に抗うようになるトーライの人々が、ブラウンのインテンシヴな収集活動などにも関わらず彼を含む西洋人にはごく少数の例を除いて容易に譲渡されることのなかったトゥブアンやドックドックの仮面に、西洋人に対するトーライの人々の抵抗の萌芽を読み取っていたと考えることはできないだろうか。

いずれにしても、ブラウンの収集活動による西洋人に譲渡できるものとできないものという区別の生成も含めて、以上に述べた点は現在の段階においては全て仮説の域を出ない。今後は、この仮説を本稿で用いたもの以外の資料を分析することによって検討して行く必要があるだろう。そのさいには、本稿では用いなかった手紙類を中心とするブラウンによる資料はもとより、ブラウン以外にトーライやその周辺の地域の人々と関わりを持った西洋人たちによる資料も検討しながら、彼らがトゥブアンやドックドックをめぐる文化事象をどのように捉え、如何にしてそれらにアプローチしようとしたのか、さらにはそうしたアプローチに対してトーライをはじめとする人々はどのような反応を示したのかなどについて明らかにして行く必要があるだろう。とりわけ、トゥブアンの収集に成功するとともにトキンキンらをベルリンに派遣したパーキンソンの動向は、彼の民族学に対する関心も相まって興味深いものがあり、留意すべき点であると思われる。また、こうした西洋人の動向の背景について理解を深めるために、この時期にトゥブアンやドックドックの仮面が当時仮面などに関心を持っていた西洋の博物館や収集家などのなかでどのような位置づけを与えられていたのか、明らかにする作業も必要であろう。そして、以上のような諸点をまずは手がかりとしながら、ブラウンによる収集活動の現地社会に対する波及効果について考察を進めて行く必要があると考える。

注

1)ここでは、とりわけニューブリテンとニューアイルランド (New Ireland) 島の間に点在するデューク・オブ・ヨーク (Duke of York) 諸島をはじめとする島々を念頭に置いている。

- 2)本節の論述は、主にブラウンの自伝と石森の論稿に基づく (Brown 1908 ; 石森 1988)。
- 3)この点は、京都文教大の橋本和也教授からご教示いただいた情報による。
- 4)ここでは、ブラウンの用いる *principal chief* という語を首長と訳した (Brown 1908 : 88)。
- 5)マテュピットは、現在のニューブリテンの中心都市ラバウル (Rabaul) 近郊に位置する。
- 6)ブランシュ湾はニューブリテン北東端に位置し、現在ラバウル市街がこの湾沿いに広がっている。
- 7)ブラウンらによる報復行動はオーストラリアの新聞や雑誌などで虐殺事件として報じられ、彼の行動はキリスト者にあるまじき行為として非難された。この点をめぐる経緯については、石森の論稿を参照されたい (石森 1988 : 49-50)。
- 8)ルーベルらは、武器類と儀礼用具が多く収集された背景には、15世紀後半以降、ヨーロッパ人が新たに遭遇することとなった文化的他者を「未開人 (Wild Men)」と「高貴な野蛮人 (Noble Savages)」という相反する2つのイメージによって捉えていたことが反映されていると指摘している (Rubel and Rosman 1996 : 64)。
- 9)この点については、本論集の林による論稿を参照されたい。
- 10) エリントンによれば、トーライ社会とデューク・オブ・ヨーク諸島周辺の島々の社会においては、トゥブアンやドゥクドゥクの所有形態などに大きな差異が認められるという (Errington 1974 : 15)。またノイマンによれば、トーライ社会内部においてもトゥブアンに与えられた役割や性格などには地域差があるという (Neumann 1992 : 267)。しかし、こうした点について立ち入ることは、本稿における議論の直接の目的ではないため、ここではあえて避けることにする。なお、第2節で述べたニューブリテン本島におけるブラウンの活動は、ここで言及したトーライの人々との相互交渉の過程であることを付言しておく。
- 11) この地域の貝貨はマングローブ地帯に棲息するムシロガイという小型の巻き貝を用いたものであり、ひもとにおいてコイル状にしたものが使用されている。トーライではタブー (*tabu*) あるいはタンブー (*tambu*)、デューク・オブ・ヨーク諸島周辺ではディヴァラ (*divara*) とよばれる。
- 12) この出来事はトーライの人々の間においても口頭伝承の形で記憶されており、ノイマンがこの伝承を採録している (Neumann 1992 : 90)。
- 13) たとえば、マックによる編著『仮面 (Masks)』には、大英博物館 (The British Museum) が所蔵するトーライの仮面の写真が掲載されている (Mack 1994 : 77)。この仮面はブラ

ウンによって収集されたものであるが、トゥブアンやドゥクドゥクの仮面とは異なる。ブラウンのコレクションについては、国立民族学博物館へ売却されるさいにニューアイルランドのマランガン (malangan) 彫像を中心とする19点の器物について英国政府の輸出許可がおりず、それらは英国国内で売却されたが、このなかにニューブリテンの仮面が1点含まれており、それが上記著書に掲載されたものと考えられる。なお、ここで引用した文献については、国立民族学博物館の林勲男助教授からご教示いただいた。

14) バーゼルの民族学博物館では1910年から1912年にかけてメラネシア地域に関する調査団が組織され、ニューブリテン周辺には本論で言及したビューラーとフェリックス・スパイザー (Felix Speiser) が派遣されている (Museum für Völkerkunde und Schweizerisches Museum für Volkskunde, Basel 1979: 71)。このうちスパイザーは1910年にドゥクドゥクの仮面をかぶった男性を撮影しており、その写真はフレイザーの著書『未開美術 (Primitive Art)』に掲載されている (Fraser 1962: 123)。これらの点に基づくならば、バーゼルのドゥクドゥクはビューラーかスパイザーによって収集された可能性もあると言えよう。なお、ここで引用した文献については、国立民族学博物館研究員の田口理恵氏からご教示いただいた。

15) この点に関連して、ブラウンがトゥブアンやドゥクドゥクをともなう儀礼や秘密結社をどのように扱ったのかを検討することは重要な作業であると思われるが、彼の自伝からはその直接的な手がかりを得ることはできない。

16) トギギは1890年代以降、宣教師とともに2度にわたってオーストラリアに旅行した経験を持ち、聖書のトーライ語訳を作成するさいに重要な役割を果たしている (Neumann 1992: 89)。なお、トギギと旅行をともにした宣教師はリックカード (Rickard) とハインリヒ・フェルマン (Heinrich Fellmann) であり、後者はドイツ人のメソジスト派宣教師で1897年にニューブリテンに着任している。ドイツ人の彼がやって来た背景には、1884年頃からこの地域が徐々に本格的なドイツによる植民地支配に入りつつあったことが関係している (Salisbury 1970: 29)。

17) たとえば、メイヤーの著書『オセアニアの美術 (Oceanic Art)』には、ジョン・マーゲッツ (John H. Margetts) によって撮影されたトゥブアンの仮面をかぶった男性たちの写真が掲載されている (Meyer 1995: 363)。掲載されている写真は、その状況から判断するとおそらく今世紀前半までに撮影されたものと思われる。なお、マーゲッツという人物の詳細については、未だ明らかにできていない。

18) トキンキンは、前節で言及したラルアナという集落のルアルア (*Jualua*) であった。ルアルアは、トーライ社会を構成する母系出自集団ヴナタライの政治的リーダーである (Epstein 1968 : 6)。なお、トキンキンらのベルリンにおける写真が、ノイマンの民族誌の口絵に使われている (Neumann 1992 : iii)。

19) トキンキンが持っていったイアヴァンガブアブア (*IaVangabuabua*) という名前を持つこのトゥブアンは、1878年のフィジー人宣教師殺害事件のさいに殺された宣教師の足の肉を食べたといういわく付きのものであった (Neumann 1992 : 206)。

文 献

Brown, G.

1908 *George Brown, D.D. : Pioneer-Missionary and Explorer*. London : Hodder and Stoughton.

1910 *Melanesians and Polynesians : Their Life - Histories Described and Compared*. London : Macmillan.

Buhler, A. *et al.*

1962 *The Art of the South Sea Islands*. New York : Crown Publishers.

Epstein, A.L.

1969 *Matupit : Land, Politics, and Change among the Tolai of New Britain*. Canberra : Australian National University Press.

1992 *In the Midst of Life : Affect and Ideation in the World of the Tolai*. Berkley and Los Angeles : University of California Press.

Epstein, T.S.

1968 *Capitalism, Primitive and Modern : Some Aspects of Tolai Economic Growth*. Canberra : Australian National University Press.

Errington, F.K.

1974 *Karavar : Mask and Power in a Melanesian Ritual*. Ithaca and London : Cornell University Press.

Eves, R.

1998 Commentary : Missionary or Collector? The Case of George Brown. *Museum Anthropology* 22 (1), 49-60.

Fraser, D.

1962 *Primitive Art*. New York: Doubleday and Company Inc.

Gathercole, P. *et al.*

1979 *The Art of the Pacific Islands*. Washington: National Gallery of Art.

石森秀三

1988 「福音と殺戮、そして民族学—ジョージ・ブラウンの生涯」『民博通信』40, 40-60。

Lawson, B.

1994 Missionization, Material Culture Collecting, and Nineteenth-Century Representations in the New Hebrides (Vanuatu). *Museum Anthropology* 18 (1), 21-38.

Mack, J. (ed.)

1994 *Masks: The Art of Expression*. London: British Museum Press.

Meyer, A.

1995 *Oceanic Art: Volume Two*. Köln: Konemann.

Museum für Völkerkunde und Schweizerisches Museum für Volkskunde, Basel

1979 *Kulturen Handwerk Kunst*. Basel: Birkhäuser Verlag.

Neumann, K.

1992 *Not the Way It Really Was: Constructing the Tolai Past*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Rubel, P.G. and A. Rosman

1996 George Brown, Pioneer Missionary and Collector. *Museum Anthropology* 20 (1), 60-68.

Salisbury, R.E.

1970 *Vunamami: Economic Transformation in a Traditional Society*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Thomas, N.

1991 *Entangled Objects: Exchange, Material Culture, and Colonialism in the Pacific*. Cambridge: Harvard University Press.

